

報告

『幼児の教育』誌の現代的意義を考える

— 日本保育学会第64回大会 自主シンポジウムから —

(平成二三年五月二日 於 玉川大学)

(記録) 浜口順子

話題提供者 / 早川好江 (日出学園幼稚園)

宮里暁美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

浜口順子 (お茶の水女子大学・本誌編集主幹)

指定討論者 / 前原 寛 (鹿児島国際大学)

司 会 / 佐治由美子 (お茶の水女子大学)

佐治 『幼児の教育』は創刊百十年を迎えました。

この春、装いも新たに月刊誌から季刊誌になったところですが、この長い歴史の上に立ち、生まれ変わりつつも変わらずに大切にすべきことは何か、一緒に考える場になれば幸いです。それでは、まず話題提供を三人の方にかけてお願いします。

浜口 私からは本誌の歴史や編集方針などについてお話しします。『幼児の教育』の前身である『婦人と子ども』は「フレイベル会」(後に「日本幼稚園協会」と改名)という保育研究会の定期刊行物として、

一九〇一(明治三四)年に創刊されました。初代編集主幹は中村五六、実際の編集者は若き研究者 東基吉でした。倉橋惣三が編集主幹になったのは一九一一年、ちょうど百年前になります。

一九四八年に倉橋を中心に日本保育学会が設立されると、学会大会報告や研究要旨などが『幼児の教育』誌に掲載されました。倉橋の死後(一九五五年)、編集主幹は及川ふみ、津守真、本田和子、田代和美へとリレーされました。二〇〇九年、本誌バックナンバーのWEB公開が始まり(お茶の水女子大学附属図書館HP内Tea Pot)、二年以上前のものは閲覧可能となっており、世界中からアクセスされるようになりました。今年四月から季刊化に踏み切り、それを機に表紙のサブタイトルも改めました。最初は

「家庭・保育所・幼稚園」（一九五四年）、次いで「乳幼児の保育と育ちを考える」（二〇〇七年）、そして今年から「子ども学の源流を次世代につなぐ」です。

編集方針は倉橋の時代からのものを意識していません。まず、家庭や園における実践を支えることを目指し優れた保育実践を言葉として共有する。この部分はいつも私たちの基本的方針として揺らぎません。そして広く内外の保育情報を伝えること。また「文化の香り」が漂い、「心豊かな」ひとときを提供できるもの、そして「ふうわり」とした感じや趣を大事にするなど、難しいがこだわりたいところです。また現代のネット社会の中で、紙媒体で保育の雑誌を出し続ける意味が新たに問われています。

季刊化されたことで、これまでより編集体制に余裕が生じたのは確かで、企画制作への意欲が一新しました。持続させること自体の大切さも再認識し、楽しみつつサステイナブル（持続可能な）に良質なものを作っていきたいと思います。

早川 皆様こんにちは。私は大学を卒業してすぐに

今の日出学園幼稚園で保育者となりまして、数年前から園長をしております。『幼児の教育』との関係は一言で申しますと愛読者です。



▲早川好江氏

先程浜口先生から、何で紙の媒体なのかという話がありました。それは、バッグに入るからです（笑）。現場にいると忙しくて、言い訳にはいけないのだけれど、正直疲れて家に帰るとくたくた、今の研究や専門書を読もうとしても体力も気力もなくて……。その中で、『幼児の教育』は大きさといい薄さといい、ひょいっとかばんに入る。書いてある言葉も柔らかく、量として電車の中で一つの記事を読める。今、家にある最も古いのがこれ、いわむらかずおさんの表紙のもんです。その前のは全部処分してしまつて残念。一九九六年当時で四五〇円。大きさの割にちよつと高いかな。それでも買ってきたというのは、自分の保育を振り返られるというのがまず一番。保育者として原点に立ち戻れる、ある種の厳しさがあるのもありがたかったです。さまざまなジャンルの方の文を読めるのも魅力

で、藤原正彦氏、土屋賢二氏のようなインパクトのある方のものも記憶しています。

本田和子先生が編集していらした時、森洋子さんのブリュウゲルの絵を読み解く連載があつて、後に本になつて受賞もされたものでした。私も大好きで、当時手元に届くと初めに読む。保育と関係ないといへば関係ない、でもその「文化の香り」に触れていることで自分が広くなれる、自力では見つけることができない世界に出会えるということがすごくありがたかつた。

今、園長として『幼児の教育』とどうかかわっているかという、先生たちみんなで読んでいます。教員が十人おりました、そのうち五人が購読しています、幼稚園でも一冊。購読者数アップに少しは貢献しています（笑）。なぜ読んでいるかという、ハウツーを教わるのではなくて、自分で考えなければいけない、自分で感じなくてはいけないから。本当に嘆かわしいのですけれど、他の保育雑誌にはハウツーの雑誌がすごく多い。そしてそれを残念ながらそのまま使っている先生たちも世の中にいるのかな

ということを感じています。拡大コピーしてそのまま壁面に飾ってしまうとか。夏の研修でも「考える」講習が以前より少なくなっています。若い先生たちには申し訳ないんだけど、熱意もあり素直でもある、言われたことは頑張る、でもそこから先が出てこないところがある。私の園としての悩みの部分でもあるのですが、『幼児の教育』を読んでまず自分で考えてみる、ということをお勧めしています。

二〇〇七年に「片づけるということ」というシリーズがありました（第一〇六巻第十号）が、ちょうどその時、「生活する力を育む」ということを園の目標にしていたのでぴつたりで、読んで考え、「そういう考え方があるね」「それはこういうことかしら」などと話し合うきっかけになりました。でも正直なところ、月刊で毎月語り合うのはきついなところがあった。季刊になったことで、家でゆっくり読んできてから「じゃあみんなどうだった？」と、自分の言葉で感じたことを話し合ったりして自分のものとして戻していくことがしやすくなったと思います。

宮里 私はお茶の水女子大学附属幼稚園に来て五年

目になります。読み手として、そして時々書き手として、そして今は作り手の一人として『幼児の教育』とかかわってきています。私は若いころとても悩み多き保育者で、保育に行き詰まると自分を追い込んでしまったりして混沌としがちでした。そんな時に、初めて原稿を書く機会を頂きました。それは、「我が家の朝」という、ほのほのとした子育て日記のようなものでしたが、その次のページに津守真先生の「子どもの自己実現と保育者の自己実現」（第八十五巻第八号）が載っていました。一人の子どもが大きなレンガを持ち上げ、歩き、それを溝に落とす、というその行為だけを取り上げて、そこから子どもの思いについて深く考察されていました。子どもしていることの意味が見えなくなっていた私の中に、津守先生の文章が飛び込んできたのです。混沌の中にいたからこそ、心の中に深く入ったように思います。

それからしばらくして「耳をすまして目をこらして」という連載を二年間させていただきました。子どもが残した遊びの痕跡から子どもの思いをたどつ

たり、子どものつぶやきに耳をすまし、子どもの姿に目をこらしてゆつくり考えたり、そんな日々の気付きを自由に書かせてもらいました。こうやって振り返ってみると、私の保育にとって『幼児の教育』はとても大きかったと思います。こんなことを日々考えている若い保育者がいたら、書かせてあげたい。保育者の思いを拾っていくような誌面が作れたらいいなと思います。

そして今は編集にかかわっています。最近、他の園の先生方と色々な所で集まったりすると、幼児教育をめぐる制度や状況が変わっていくただ中で自分たちはどうしていったらいいのかと語るエネルギーが高まっているような気がします。伝統は未来を志向する。これだけの過去があり、また始まりがある。新しいものの本質と、つないできたものの本質の両方を見ていくために、歴史はとても大切な意味をもっていると思います。私が思い入れをもって出した企画が「子どもが育つ場所を訪ねて」です。第一回目は大阪の愛珠幼稚園でした。とても歴史を大切になさりそれを生かした保育をしている。そう



▲前原 寛氏

「いう先生たちとお話ができたのはとてもうれしいことでした。大事なことを考え保育を創り出している人たちととりあえず会ってつながる、それが世界の中につながっていく。『幼児の教育』が、いろいろな人と出会える扉、通路になればいいと思います。」

佐治 それでは、今度は指定討論者として前原先生からご意見やご質問などお願いします。

前原 宮里先生が「伝統は未来を志向する」という言葉を出してくださいました。この雑誌のもつ歴史の重さというものが表れています。私自身、「古典は新しい」と思っています。それは、今の時代にも通用する新しさを古典はもっているということだと思います。本来の意味で通用する部分がなければ、時間の中に埋もれて見えなくなってしまう。

宮里先生は連載をする機会の中で自分への振り返りを意識するようになったということですね。今は作り手として「子どもが育つ場所を訪ねて」を通して、こんなことをしていますよというだけでなく、背景とか、自分

自身の思いを反映させながら書かれているのでしよう。私自身、保育をちゃんと学び始めたのがとても遅い人間で、保育所の仕事とかかわりつつ、最初は倉橋惣三選集を「この人は確か有名な人ではなかったか」ということで読み始めました。その中に「『家なき幼稚園』を訪ふ」というのがあり（第二十四巻第一号）、すごい実践だなと思い、また倉橋の文章がそれをとてども触発する文章でした。宮里先生が言われたように、ただのルポではなく保育の場に立ち会ってインスパイアされていることが伝わってくるような、書き手の思いが濃く反映されてくる内容になっています。今回の試みは、季刊になる前からこの雑誌が本質的にもっていたものをよりよく活かしていくということなのかお聞きしたいと思います。

早川先生が本当に愛読者なんだなと思ったのは、「持ちやすさ」を指摘されたことです。保育者は日誌だとか意外と大きなものを持ち歩きます、そこにさらに重い本などがあると……。近ごろのハウツーものの雑誌は、大判でカラー化・図案化が進んでいて、「大きくて見やすい」。今の若い人は老眼が進ん

でいるのかな? と思うぐらい(笑)。園内研修の中で活用されているということですが、季刊化による変化など、言語化された保育をどのように受け取るかということについてとてもいいお話を伺いました。

そこでお聞きしたいのは、そういう形で活用されていく中で保育者の育ちがどのような形で現れているのかということです。経験年数とは違う充実した育ちというものがあるのではないのでしょうか。

宮里 「子どもが育つ場所を訪ねて」は幼稚園だったり、プレイパークだったり、いろいろな所に、保育者自身が訪れる、ということが特徴です。思いを反映するというシリーズをつくっていきたい。私たちが大切にしているのは、研究成果や結果よりも、「特集」巻頭座談会、「事例を読む」シリーズにも見られるように、「対話」とか「応答」というコンセプトなんだなと伺っていて思いました。

早川 まだまだこれからののですが、園では先生たちが二十代と五十代とに分化しているのです、若い人が何を感じたかというところを自分の言葉で語りやすくするための取っ掛かりになっています。また保

育者というのは、すべての部分でプロでなくてはならないと学生時代いわれました。本は本来自分で興味をもって読むのですが、強制的にでもまずは読んでもらって、だんだんいろいろなことへの好奇心や興味を広げてもらいたいです。

佐治 会場から感想やご質問などどうぞ。

会場 先程お話にあった大阪の愛珠幼稚園にいました松村です。WEB公開されているバックナンバーで、中村道子元園長先生のご苦勞を知ったり、また大阪の最初の保育者氏原銀、膳真規子ご姉妹の文章に触れたり、しかも気軽な感じで書かれたものもあってとても興味深いです。過去のものを知る、「木を見て森を見る」ということを愛珠で学び、『幼児の教育』の古いものからもたくさん学ばせてもらっていることを申し上げたいと思いました。

会場 国立音楽大学の西原です。私は特に熱心な読者というわけではないのですが、『幼児の教育』の特徴は、他の雑誌と比べると、保育の中の大切なもの、



専門的なものとのとらえが違うのではないかと思いません。理論がまずあつてその上に応用が積み重なるような発想をとらない。基本的な理念は大学の先生がつくって現場がそれを応用するのは違う。親のやる保育の中にも大事な専門的な部分があるというような、まだ言語化されていない事柄をとらえようとするやり方です。倉橋が偉いとしたら、それは学者であるだけでなく、ずっと保育の場のただ中にいて保育を言葉にしようとしたから。これが『幼児の教育』のベースになっているのだと思う。保育はエンジニアのような仕事とは違って、理論的なものや地を這うような実践との間を行ったり来たりしながら、その中で専門性なり急所を見つけていく仕事で、そこを『幼児の教育』にしっかりとやってもらうと、現場の人の期待に答えられるのではないかと思います。

前原 大事なことを言葉にすることの難しさ、でも言葉にしないと大事なことは伝わっていかない、ということの挟間はさまに常に屹立はだかしているのが『幼児の教育』なのでしよう。わかりやすく簡単に、しかしマニユアル化に落ち込まないようにしつつ語り続ける。

そういう場、媒体が残ることが大事だと思えます。発行部数がなかなかうまくいかないという現実的な問題も片一方であろうと思えます。保育園の経営でも、目玉保育とか一点豪華主義といった「子ども集め」の保育をしようとする傾向が世の中にあり、そこに飛び付く親も確かにいます。しかし、保育の本質とか原点とかを外さないような保育経営をやつていくと、それをわかってくれる親もたくさんいるという現実もあります。『幼児の教育』においても、大事なことをちゃんと受け止めてくれる人はたくさんいらつしやるはずです。だからこそ本質的なところを外さずに語り続けることが求められていると思えます。

佐治 書き手の言葉を大切にするという編集方針も大切にする。いつもハンディで身のそばにあるという利点から、それが生きた知恵となつて活用されていくように、冷え固まつてしまう言葉でなく、そこからまた膨らましていくことのできる言葉を提示していくこと。そのような使命も感じさせていたかったです。今日はどうもありがとうございました。